

## 人のうごき

(平成23年2月末)

人口 94,584(-85)

世帯 47,898(-21)

( )は前月比

## 固定資産税・都市計画税

(第1期)

5月2日までに納めましょう

## 編集後記



▶衝撃映像が現実でとてもつらい大震災。妻の実家の地区も津波と火事で壊滅状態。幸い家族は無事との一報だが、これからの生活はどうなるのか。良い思い出がない遠い地の力に少しでもなりたい。(え)

▶雪解けが進み、春の気配を感じる季節になりましたね。ここ数年、畑を借りて週末菜園を楽しんでいる私。そろそろ苗の準備を始めなくては。今年も元気に育ててくれるといいなあ。(こな)

▶防災協力自動販売機やハザードマップなど、災害時のためにさまざまな対策が取られている。でも、こうしたものが役に立つ日が来ないことが一番だと、今回の震災を見て改めて実感した。(お)

▶芥川賞作家、八木義徳氏の作品は、読み進む程、人柄を知る程、奥深く興味深い。登場する馴染みの地名に地元出身ならではの面白さもある。久々に訪問した港の文学館も資料が増え、見応え十分だ。(ゴ)

▶蛇口から水、スイッチ一つで灯り。こんな「当たり前」が、実は幸せな事だと気付かされた今回の大震災。被災地の一刻も早い復興を願うとともに、今の生活の大切さをかみしめた3月だった。(き)

## 広報むろらん

2011年4月1日 No.961

### ■今月の表紙

今月は編集最中に東北関東大震災が起こり、連日報道される悲惨な状況に、急ぎよ表紙を差し替えました。災害はいつ襲ってくるか分かりません。日ごろから防災意識を持ち、災害に備えておきましょう。

### ■発行・編集

北海道室蘭市市民対話課  
〒051-8511 室蘭市幸町1-2  
☎ 0143-25-2193  
FAX 0143-25-2835  
HP <http://www.city.muroran.lg.jp/>

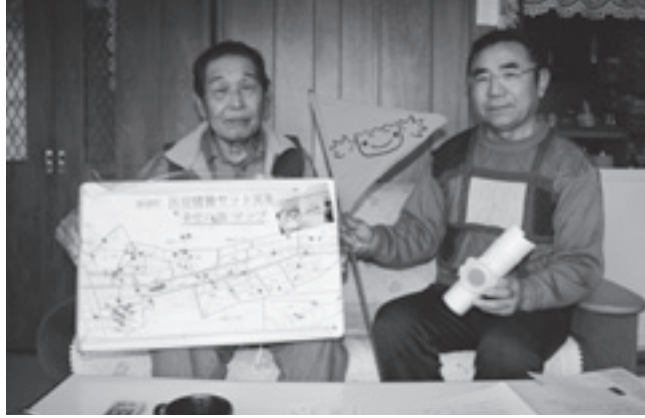
### ■印刷

日光・富士印刷特別共同企業体

# 地域の力

地域独自の取り組みや、活性化につながる活動を今月から掲載します。紹介してほしい地域の取り組みも募集します。詳細は市民対話課(☎25-2193)へ。

## 陣屋町福祉委員会



「救急医療情報セット」と「幸せの旗」を持つ野呂さん(右)とそのマップを持つ川口代表(左)

## 自分たちができることは自分たちで

「行政に頼る前にやることはたくさんある」。地域の安全を一番身近な自分たちで守ろうと、3年前民生委員2人で陣屋町福祉委員会を立ち上げ、現在は福祉委員と6人で行動している。きっかけは、身近に起きた「孤独死」。

このような悲劇を少しでも無くしたいと、昨年3月「幸せの旗運動」を開始。元気であれば玄関前に旗を出し、出ていないときには地域の福祉委員や近所が見守る。この運動をすることで訪問のきっかけが、コミュニケーションもとやすいう。さらに昨年9月には、独居老人などに希望を聞き、万が一のことが起きた時、自分に関する必要な情報がすぐに分かる「救急医療情報セット」のあつせんを始めた。氏名、生年月日などの基本的なことから持病の有無や飲んでる薬、かかりつけ医や治療内容などについて記入した用紙を透明な筒の容器に入れ、冷蔵庫にしまっておく。冷蔵庫には目印となるステッカーを貼っておき、救急隊員が到着し、一刻を争う時に役立つことが期待される。「災害時に壊れにくいのは冷蔵庫。どこの家にもあるでしょう。容器代の100円のみ負担してもらっています」と同委員会代表の川口さん。

発案から実施までの速さと実行力が同会の自慢。町会や住民の協力があるからこそできるという。「これからもできる事をコツコツやっていく。地域の人の喜ぶ顔がエネルギー」と自身も笑顔を見せる。

## 生誕100年 八木義徳の世界①

### 血と土とそして海の風から

#### 血脈と向き合って(1)

室蘭出身で最後の文士といわれる芥川賞作家の八木義徳が、今年生誕100年を迎える。

八木の生まれた明治40年代の室蘭は、まだ室蘭町と呼ばれ、日本製鋼所と室蘭製鉄所(現新日本製鐵室蘭製作所の前身)が相次いで設立され、本州からの移住者やたくさんの労働者も生活していた。

今日の「ものづくりのまち室蘭」の夜明けともいえる時代であった。時代は人を生み育てる。八木の生い立ちやその後の人生にも当時の時代が色濃く映し出され、作品には数多くの私小説的な部分が見とれる。

このコーナーでは、北の港町、ふるさと室蘭を背景に、自身の世界を生み出した八木義徳の人と作品について毎月紹介していく。

父は町立室蘭病院の院長で、後に開業した高名な外科医田中好治。母は養家の没落により室蘭町で芸妓となった八木セイである。二人の間の次男(庶子)として、八木は明治44年10月21日、現在の室蘭市中央町で生まれ、戸籍上では人力車業夫妻の六男として入籍されるが、3歳までは別の乳母夫妻に育てられた。こうした複雑な生まれやその後の非凡な人生は、自らの作品に大きな影響を与え、故郷や父に対する強い葛藤は、深く自己に向き合う原動力となった。自己表現の場を文学に求めて生み出された作品の多くには、故郷があり、受け継がれてきた血があり、ほかの誰でもない自分自身がいた。八木は書くことによって、ルーツに対する愛憎と、そこで育まれた喜怒哀楽のすべてを受け入れることが出来たのだった。

(八木義徳生誕百年記念特別展を開催します。詳細は9ページを参照)